

都道府県別賞一等

伝えたい、あの人に

北海道 岩見沢市立北村中学校 三学年

原田 一步

あなたにはもう一度心から会いたい人はいるだろうか。私にはいる。伝えたいことを伝えておくべきだったと後悔してもしきれない。「大好きだよ。」「じいちゃん、今何をしているの？幸せ？私は元気にしているよ。もう中学三年生になったよ。」そう話したい。決してもう叶わないことだとわかっているけども。

日本では、一日に平均約千六百三十五件もの交通事故が起こっているそうだ。こんなにも多く起こっていることには驚いてしまう。でも私は、身近に事故にあった人がいなかったのも、どこか他人事のように思っていた。でも、あの日。事故のせいで大事な人が一瞬にして消えてしまうこと、自分には何もできないのだということを知ったあの日。目の前で苦しんでいる人がいるのに自分は何もしてあげられない無力感に苛まれた。

私は小さい頃から、よく祖父が営んでいる喫茶店に家族で行っていた。そこで、からし入りチーズサンドイッチとメロンソーダを頼んで食べるのが一番好きだった。私は、いつも祖父に仕事でありながら抱っこをせがんでいた。祖父が抱っこをしてくれたとき、私はとても満足そうな顔をしていたという。私が帰るときには、祖父が「ほっぺにチューして。」と言ってくるので嫌々ながらにほっぺにチューをして帰るのがお決まりになっていた。私は祖父が大好きだった。

そんな祖父が、ある時突然事故にあってしまったのだ。そんなはずがない。嘘であってほしいと思っただが、病院に行き意識不明になりベッドで寝ている祖父を見たら一気に現実に戻された。「なぜ、なぜこんなことが起きてしまったの。ねえ、起きてよ。」そう私は祖父に話しかけても一向に目を覚ましてくれない心配はなかった。何もできない自分に無力感があった。

祖父は、手術をしないといけなくなつた。お医者さんは「このまま手術をしないと命が危険な状態になります。」と、とても冷静だった。私たちが不安にならないように優しくそう言ってくれたのだ。父はすぐさま「お願いします。父を助けてください。」涙ながらに言っていた。今までに見たことのない父の辛そうな顔を見て事態の深刻さを感じた。手術は成功し一命は取り留めたものの、意識は戻らなかった。それでも私は諦めなかった。祖父が目を覚まし、また元気になるように願って私は、毎日病院に通った。しかし、その一週間後に祖父は永遠の眠りについた。その顔は、とても優しい笑顔に見えた。

## 第61回中学生作文コンクール

最近、私は、よく生命保険のコマーシャルを目にする。でも、生命保険という言葉は知っているが、どのようなものかは知らなかった。だから父に聞いてみた。「生命保険ってどういうものなの。」父は「生命保険に入っている人がもし亡くなった場合、その遺族に残してあげるお金のことかな。まあ、簡単に言えばよく言われる『保険金』だな。」そう教えてくれた。父にもう少し詳しく聞いたら、九年前に祖父が亡くなったときに祖母がそのお金を貰ったそうだが、でも、祖母はそのお金は今でも使っていない。大事に今でもとってあるという。祖父が最後にくれたプレゼントのようなものだからだそう。そのことを知って、生命保険は亡くなった人の最後の贈り物だと思った。生命保険は、自分や家族を守る大事な一つのお守りだ。もしものときに、家族が辛い思いをしないためのせめてもの心づかいだと思った。家族が辛い思いをしないために残してくれたのだと、祖父の愛を感じた。

大事な人がいて、今幸せなのは、当たり前ではないんだと祖父の死をきっかけに身をもって知ることができた。これからはこの一瞬一瞬を大切に噛み締めながら生きていきたい。伝えたいことがあるなら、恥ずかしがらずためらわず伝えたい。まっすぐその人の目を見て。この思いが何年か後にそうしておいてよかったなと思えるように。「気づかせてくれてありがとう、じいちゃん。」